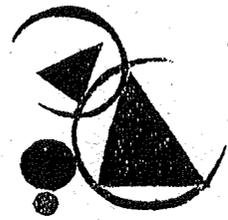


周縁民衆史の視座



今西

一

昨年、歴史文化ライブラリーの一冊として、『文明開化と差別』を書かせていただいた。少年時代は、京都の祇園と被差別部落の中間地域に育った私には、学校教育と「伝統芸能」からの逃避が、日常生活の重要な課題であった。その私が、「登校拒否教師」とはいえ大学で教鞭を取り、芸能民をテーマにした本を書くとは、なんと皮肉なめぐり合わせである。しかし、なぜこのような本を書くようになったのか、現在私が考えている幾つかの問題を紹介して、今後の展望を述べてみたい。

周縁民衆史と「階級闘争史」一九七八・七九年の西川長夫と色川大吉との歴史文学「論争」のなかで、西川は、カール・マルクスの『ブリュームル一日』の「ルンペン・プロレタリア」論を批判しながら、「階級史的な把握が民衆の内在的な理解の障害になりかねない」という重大な問題提起を行っている（歴史研究の方法と文学）『歴史学研究』四五七号）。

また安丸良夫は、「犯罪、病気、精神疾患、社会的脱落者などのなかには、健康で平均的な生活者たちのうちには容易に発見することのできない人間性についてのより深い真実が明瞭なかたちで

表現されている」（『前近代の民衆像』「方法としての思想史」校倉書房）ことを、評伝『出口なお』（朝日新聞社）などを通して見事に具体化している。

のちに安丸は、エリック・ホブズボームのような、伝統社会の民衆運動を、プロレタリアートの階級闘争の先駆的な形態ととらえる研究に対して、そのなかからカルト的な集団が生まれていることを説いたノーマン・コーンの研究を対比させている（『一揆・監獄・コスモロジー』朝日新聞社）。私たちもそろそろ、伝統社会の民衆運動を、単純に近代の階級闘争の先駆形態とするドグマから解放されることが必要である。

そして伝統社会の周縁民衆世界を、ストリートに近代の労働者階級の形成史として見るのではなく、彼らが都市の周縁部にスラムや被差別部落を形成し、「願人・乞胸・非人などの歴史的系譜をもった貧民街は、比較的早い時期に縮小・解体していく」のに対して、「旧穢多身分の場合は、その後も外部からの流入者を抱えこんで、縮小するどころか逆に増加の一途をたどっていく」（馬原鉄男『日本都市下層社会研究覚書』「部落問題研究」七四輯）ことを考え

てみる必要がある。『文明開化と差別』は、そのための準備的な研究である。

その「下層社会」の民衆と労働者との歴史的な対立や、「下層社会」からぬけだした労働者が、「下層社会」の人びとをどのように見ているのか、という問題も次に考えてみたい課題である。戦前の労働運動や水平運動のリーダーであった平野小劔しょうけんは、「或る夜のこと」という文章のなかで、仲間の労働運動の活動家たちが、「特殊部落には美しい女が多いそうだと云ふが真実かね。——どうだろう社会運動者に一人々々世話をしないか……。」（略）

「朝鮮の女や支那の娘よりは、いくらか気持がよいだろう生活様式も変っていないからね……」

と発言するのを聞いて、「俺はその後、殆ど集会に顔を出さなくなった」と回想している（『水平運動論叢』世界文庫）。

労働運動の指導者たちのなかにさえ、このような部落差別、アジア差別、女性差別が存在する。日本社会の「重層的な差別」の

構造や民衆の差別意識・帝国意識が、どのようにして形成されるのかを考えてみる必要がある。私は、もう少し国民国家や文明化が、どのような差別をつくりだし強化していったのかという問題を、少なくともアジア地域を視野に入れながら考察してみたいと思っている。

「第三の性」 また、すでに一九七〇年代に、広末保は、「歌舞伎はなぜ女形という虚構の性を必要としたのか」という疑問を発している。氏は、「遊女歌舞伎が禁止され、ついで若衆歌舞伎も禁止され、そのため女形の出現が余儀なくされた」という「教科書的女形成立論」を批判して、「弾圧にたいする巧みな韜晦的抵抗が、それまでなかった論理や虚構の方法を発見させるということはあるだろう」が、「女形という虚構の性こそ、もっともふさわしいとして受け入れ育てる潜在意識が、悪所の意識として本来あったればこそ、その韜晦は積極的な可能性へ転換された」とする（「歌舞伎の思想」『近世文学にとっての俗』影書房）。

私が、本書で歌舞伎役者の買売春や悪所の「半月ふたがり」という「両性ドログキユヌス具有」を問題にしたのは、この広末の言う「虚構の性」が念頭にあったのと、いまひとつは最近よく話題になっている「第三の性」が気になったからである。私が七年前にニューヨークに行った時、最初に驚かされたのは、雑誌によくでてくる「トランス嬢」の写真である。「トランス嬢」というのは、どこから見ても女性であるが、男性の性器だけをつけた人たちのことである。

最近のインターネットを見ると、アジアのなかでもこの「トランス嬢」が流行している。私が現在住んでいる韓国では、ハリスという性転換手術をした「美女（美男？）」のCD付き写真集が、「イブになったアダム」というコピーで売り出されている。李朝の男寺党ナムサダン（旅芸人）の男色はあるが、儒教道徳の厳しかった韓国も、五年前に一年住んだ時とは、大きく様変わりしてきている。

この問題は、近年やっと「性同一性障害」やトランス・ジェンダーの問題として日本でも取り上げられるようになったが、実は歴史的に根深い問題である。写真家の石川武志は、『ヒジュラ——インド第三の性』（書言社）のなかで、ヒンドゥー語で「半陰陽（真性半陰陽）」の意味をもつヒジュラと呼ばれる人びとが、インド・パキスタン・バングラデシュで四〇万人から五〇〇万人いると語っている。そんなに「半陰陽」の人が自然に多いわけではないので、自ら男性の性器を去勢してヒジュラとなり、カースト社会の外に生きている人たちがいるのである。

ヒジュラも、ラジャスタンなどでは「聖なる存在」として崇め

られている者から、カルカッタやニューデリーののように、買売春に従事し、物乞いをしてスラムに住んで、「不浄の存在」とされている者まで、その存在形態は多様である。そもそもヒンドゥー教では、シヴァ神自体が王妃パールヴァティと合体した両性具有神である。この他にも、タヒチのマホー（Mahoo）「マフ」と呼ばれ、女装して女性と同じ生活をする人びとや、やはり女装して「中間者」の呪術師・医者として生きる、北米先住民のベルターシユなどが有名である。最近では、オマーンのハンニースなども紹介されている。

ミッシェル・フーコー流の言い方をすれば、まさに近代社会とは「お前は何者か」を常に問う社会である。近代的「自我」や「主体」という神話とともに、男性と女性の性差が厳しく問われ、「男らしさ」と「女らしさ」が強調される。そして「日本人」と「外国人」が峻別され、「日本人らしさ」が強制される社会でもある。しかし、これらの神話も、わずか百数十年で崩壊してきているのである。この近代の「神話」が崩壊するなかで、伝統社会のなかの「両性具有」や「虚構の性」が、もう少し見直されてもいいのではないかと考えている。アジアのなかの日本人の帝国意識の形成と、廓の歴史と娼妓「解放令」を書くのが、次の私の研究課題である。

（いまにし はじめ・日本近代史）

文明開化と差別

今西 一著

〈歴史文化ライブラリー17〉四六判／一七〇〇円（税別）